

法然と病

加藤善朗（京都西山短期大学）

建久9年、法然を襲った「病」と、そのなかで得た「三昧発得」の体験は、各種法然伝や法語類に載せられているが、その史料評価については、消極的に取り扱われてきた。

田村圓澄氏は『選択集』末尾には善導の「三昧発得」だけが記されるのみで、法然自身の「三昧発得」のことも、「二祖対面」のことも書かれてはいないことをあげられる。このような理由で、『三昧発得記』の内容は、門弟によって創出された虚構であって、浄土系教団の祖師であり、救済者として仰がれるべき仏の垂迹を讃歎するための創作であるという。

たしかに『西方指南抄』所収18語法語として、「近代の行人、観法をもちあるにあたはず。」として観想を否定している。ただ、そのような言説により法然の宗教経験まで否定し去ることはできない。

『拾遺和語灯録』所収の建久9年4月26日付「津戸三郎為守へつかわす御返事」等の記述によると、建久8年から9年にかけて法然は瘧（間歇熱）を患い、生命が危険な状態にあったことがうかがえる。3月からの『選択集』撰述、同4月の「没後遺誠文」の起草等は、身体的危機と表裏をなす影像の横溢の体験であった。

ことをうかがわせる元久元年（1204）は、七二歳の法然が、延暦寺からの抗議に対して、比叡山の圧力から『七箇条起請文』という門弟に向けての自己規制を促す文書を余儀なくしたためた年にあたり、そのような精神状態との関係において考察されるべきであろう。

ユング心理学には、個人的無意識と集合的無意識という概念がある。個人的無意識とは個人体験に基づく過去の記憶や獲得されたイメージが、忘却されたり、抑圧されたりしている意識領域であり、集合的無意識とは、個人的な枠組みを乗り越えて人類が普遍的に共有する無意識であり、そこに潜む原初的イメージ、つまり元型（Archetype）は、神話・儀礼・宗教思想などを通じて象徴的に現われてくると考えられている。それは通常、夢や精神分析によってしか意識化されないとされているが、深い瞑想に入ることによっても体験し得るので、宗教体験を語る上で、集合的無意識の存在は非常に重要である。日想観からはじまる法然の三昧発得で得たイメージ、阿弥陀仏の姿や浄土の光景を再構築する能動的想像力も、この集合的無意識に源を発する心的エネルギーと考えられないだろうか。

聖教を披閲しない日はないというほど漢文のテキストを精読し、説相に通曉していた法然を建久九年から訪れた身体的危機と引き換えに得られた影像の横溢に浸る法然を、「三昧発得記」テキストの書承過程で知り得た親鸞・源智だけでなく、建久九年から元久三年までを法然とともに過ごした信空・隆寛・證空ら膝下の弟子たちは知見していたであろう。

彼等にとって師の宗教体験を絵画化した当麻曼荼羅の存在が与えた衝撃は想像に難くない。そのような背景があったからこそ当麻曼荼羅の図像に啓発された思想を展開させ、当麻曼荼羅の顕現を語る縁起が、さまざまな物語として展開したのだと考える。初期法然伝において三昧発得の絵画表現は、当麻曼荼羅の図像を借りておこなわれていることと無縁ではないと考える。

瘧（おこり）/三昧発得/『西方指南抄』/醍醐本『法然上人伝記』/当麻曼荼羅/浄土イメージ